

有吉佐和子

開幕ベルは華やかに



有吉佐和子

開幕ベルは華やかに



開幕かいまくベルは華はなやかに

一九八二年三月一〇日 発行
一九八二年七月一五日 一〇刷

著者 有吉ありよし佐和子さわこ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号 一六二

電話（業務部） 03-二六六一五一二
（編集部） 03-二六六一五四二

振替東京四一八〇八

印刷 二光印刷株式会社

製本 神田加藤製本株式会社

定価 一二〇〇円



© 1982, Sawako Ariyoshi
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

開幕ベルは華やかに＊目次

第一章	眠れない夜	7
第二章	眠り過ぎた朝	15
第三章	稽古に入るまで	26
第四章	顔寄せ	38
第五章	青山斎場にて	62
第六章	初日の大事件	80
第七章	雨の朝	108
第八章	大きな鯛	120
第九章	二十一日	132
第十章	二十三日午前十一時前	136
第十一章	二十三日午前十一時	143
第十二章	開幕ベルは華やかに	156
第十三章	紅子への挽歌	163

第四章	十二時四十分	167
第五章	岡村警視正の登場	177
第六章	長い長い第二幕	193
第七章	次の事件	207
第八章	定年退職者の余生	215
第九章	第二の殺人	220
第十章	第三幕の出来ごと	237
第十一章	広田蟹夫の調書より	248
第十二章	田中清の調書より	279
第十三章	八重垣光子の調書より	295
第十四章	おでんが煮つまった	299
第十五章	二人の晩餐	307
第十六章	カーテンコール	319

装幀 福田繁雄

開幕ベルは華やかに

第一章 眠れない夜

腕時計の針は、まだ十一時を示していなかった。テレビの上に乗っているビデオ装置のデジタルは、十時四十八分という数字を示し、渡紳一郎が目を凝らしていても、なかなか四十九分にならなかった。彼は、いらいらして机の一番上の抽出しから、一粒の白い薬を取出した。誘眠剤である。しかし、それを飲む時間にはまだなっていなかった。

彼は不眠症であった。彼の記憶では、子供の頃からその症状があり、決して齡のせいではなかった。幼い日、家に来客があると、その客が帰った後も興奮して眠れず、両親に苦しさを訴えたものである。淋しくても眠れない。不愉快なことがあれば、もちろん眠れなかったが、何事もない夜でも眠れないのだ。枕に頭がつくと、すぐ寢息をたてる人間を目撃すると、彼は頭に血が昇った。人種が違うのだろうと今では達観している。神はこの世に男と女を創り給うたのではない。神はこの世に富める者と貧しき者を創り給うたのではない。神はこの世に眠れる人間と、眠れない人間を、はっきり二種類に分けて創造したのだ。恨むとすれば、天地創造の神の無分別、いや、分別を恨むべきだ。

紳一郎は、小さな台所に立って湯を沸かし始めた。時計は十時五十八分になっていた。誘眠剤の量を増やさずにすむためには、飲む時間をきっちり守り、あまり空腹でないうちに、しかもあまり食べすぎない夜に、熱い湯で飲み下さねばならない。彼は夕食を六時から七時までの間に必ず一定量を食べるようにしていた。そのために八時以降の食事の約束は決してなかったし、

同業者たちと深夜までバアで酒を飲むことも止めていた。アルコールの後では、誘眠剤は効き難く、倍も飲まねば眠れず、しかも醒めるのが早いときている。碌なことはないのだ。だから彼は仲間うちでは「付きあいの悪い男」とされていた。しかし紳一郎は、どう思われようと、貴重な睡眠のためには、何を犠牲にしてもかまわないという哲学を、はつきりと持っていた。女でさえ、彼の睡眠の妨げになるような相手だったら、どんな美人でもご免だった。

湯が沸騰してきた。時計は十一時をようやく二分過ぎたばかりだった。彼は、ガスを止め、ついでに元栓も切った。一人でワンルームのマンション暮しをしていると、すべてに慎重になる。彼は、ベッドの傍にある週刊誌を二、三頁くり、放りなげ、待っている十一時二十分がなかなかやって来ないのに我慢がなくなってきた。時計が止まったかと思う。しかし、腕時計も、ヴィデオのデジタルも同じく十一時九分を示していた。

十一時十分、ダイニングの片隅にある電話が鳴った。こんな時間に、電話をかけて来る編集者はいない筈だった。彼はずっと前から電話帳に電話番号をのせないようにしていたから、非常識な読者からかかって来ることもなくなっていた。しかし紳一郎は、ほっとして受話器を取上げた。相手が誰であれ、これから十分間を潰すのには、もって来いの機会だった。

——今晚は。まだヤクはやってないでしょ？

ついこの間まで聞きなれた声だった。紳一郎が十一時二十分に誘眠剤を飲む習慣を正確に知っているのは、この世で彼女があるばかりだった。

「うむ、今、湯を沸かして準備万端ととのえていたところさ」

——それで時間がなかなかたたなくて、いらいらしてたんじゃない？

「君はどうしたんだい。珍しいね、こんな時間に暇を持て余しているなんて」

——暇どころなもんですか、大変なことが起ったの。だからあなたに電話したの。ねえ、本当に大変なのよ。

「君ねえ、その口癖はもう直さないか。若い娘ならともかく、中年の女が、大変というのは聞き苦しいよ。大変というのは殺人事件でも起ったときに言うべきだ」

——だから殺人事件ですよ。

「誰が殺されたんだ」

——私。私が殺されかかっているのよ。

紳一郎は溜息をついた。この女のお喋りの相手をしてしまうと、少くとも三十分はかかるだろう。何も夜中にこんな電話をかけてくることはないだろう。彼の不眠症について、彼女ほど知っている人間はいない筈なのに。

「君ねえ、そういう話なら、どうしてもっと早い時間にかけて来ないんだ。明日の昼すぎにでもかけ直してくれよ。今は何時だと思ってるんだ」

——十一時十五分。だけど、たった今までお客がいて、やっとその人たちが引揚げたところだし、時間があなたの誘眠剤飲む前だし、明日の朝はその人たち、あなたのところへ午前十時頃に行くことになっているから、だから電話をかけたのよ。

「その人たちってのは誰だ。君を殺そうとしている奴らかい？ どうして明日、僕のところへ来るんだ」

——いい？ 落着いて聞いて頂だいね、順序よく話すから。

「そう願いたいね。出来るだけ手短かに頼むよ」

しかし彼女の話は手短かにはいかなかった。「その人たち」というのは紳一郎もよく知っている東竹演劇の重役と企画室長とプロデューサーであったからである。「その人たち」が今日の午後八時すぎに彼女の家に揃って現われ、膝づめ談判で来月の帝劇の脚本を書いてほしいと頼みこんだというのだ。

「来月？ 何月のことだい？」

——十月よ。

「馬鹿な。今日は九月十日だよ。第一、来月の帝劇なら広告も前売り券もとっくに出ている筈だ。役者も作者も半年前から決っていただろう」

——もちろんよ、ところが作者がどういふ訳か急に降りてしまったの。理由を会社の人たちは決して言わないんだけど、ともかく作者がいなくなったのは確かなの。

「作者は誰だったんだ？」

——加藤梅三よ。

紳一郎は唸った。加藤梅三なら有り得るかもしれないが、演劇界の長老であり、一徹な性格で、怒り出すと何をやるかしのれないが、しかし数々の名作を書いてきて、今でも第一線の書き手であった。妥協を許さず、演出家としても厳しさに定評があった。どんなスタアも震え上り、しかし彼の演出なら喜んで出演する俳優も多かった。彼が才能のある俳優しか配役しないことを知っていたからである。

「加藤さんが降りたのは、いつなんだ？」

——今日らしいわよ、決裂したのは。その直後に皆さんが私のところへいらしたみたい。

「君に何を頼んだんだ」

——代りに脚本を書いてほしいって。全員で頭を下げたわ。何の条件もつけませんってよ。

「まさか引受けたんじゃないだろうな」

——引受けたわ、だから大変だって言うのよ。

紳一郎は絶句した。信じられなかった。事件は九月十日の夜である。芝居は十月の二日か三日に幕が上る筈だ。それまで一カ月もないのだ。

「軽率だな、それは。どうしてそんな馬鹿な話を引受けたんだ。準備の時間が足りないし、碌なものを書けないだろう。恥をかくのは君自身だぜ。断れ。今からでも遅くない。この電話を切っ

て、すぐ東竹の連中に電話して断るんだ」

——いやよ、断らないわ。私は引受けたのよ。

「どうしてだ、最悪の条件じゃないか」

——でも考えて頂だい。主演は八重垣光子と中村勘十郎よ。こんな大物に書く機会なんて、私のような駄出し作家には滅多にあるものじゃないわ。女優で言えば、八重垣光子の代役を無名の新人がやるようなものでしょ。お願い、助けて頂だい。

「僕が君を、どうやって助けるんだ」

——私は一つだけ条件を出したの。演出は渡紳一郎先生にお願いして下さいって。

「馬鹿を言うな」

——だって、でなかったら私も不安ですもの。劇作家としての私の生死は、来月の帝劇の成功にかかっているのよ。これに失敗したら、劇作家小野寺ハルは殺されてしまうのよ。救ってくれるのは、演出家のあなたしかいないわ。

「君ねえ、気を鎮めてものを言えよ。僕と君は離婚して一年になるんだぜ。週刊誌が何を書くと思う？ 演劇界でも誤解されるよ」

——週刊誌は大丈夫。私は若い歌手でも美人女優でもないしね。あなたは推理小説の売れっ子作家なんだから、あなたの連載がほしいと思えば週刊誌も記事にしないでしょ、どこも。よしんば記事が出るとしたら、公演の宣伝になって多少の観客動員にはなると思うのよ。お客が来なくちゃ、芝居は成功とは言えないでしょ。演劇界の誤解なんて怖くないわ。どうせ人は誤解しかしないのよ。ともかく、あなたも気を鎮めて眠って頂だい。明日は十時に、あなたのマンションのドアの前に、今日来た三人が立っているわ。朝刊が中に引取られたら、目がさめた証拠ですから、そうしたらチャイムを押して下さい。決して安眠妨害をしないで下さいって念を入れて話しておきました。私を助けると思って引受けてね。お願いよ。それじゃ晚いから、おやすみなさい。明

日、東竹の人たちが帰ってからでも電話して下さらない？ お待ちします。もう十二時すぎたから、詳しいプロットや何かは、明日にするわね。

「いや、今しろよ。題材はもう決っているのか」

——ええ、宣伝はもうしてしまっただし、切符ももう四万枚売れているので、題名も材料も変えられないらしいの。川島芳子を八重垣光子がやるのよ。題は加藤先生のおきめになったまま。それで切符を売ってしまっているからねのね。でもプロットは私の思うようにしていって。

「冗談じゃない。君は中国問題なんか何一つ知らないじゃないか。政治音痴の君が川島芳子に手出しするのは危険だ。やめろ、やめろ、話にならないよ」

——やめない。書きたいの。もちろん川島芳子は実名にしないわ。登場人物はすべて私のフィクションよ。中国が文学座の芝居を上演させなかった話ぐらい、私は知ってるわ。でも四人組時代は終わったでしょ、大丈夫よ、中国が悪いと書きはしないから。戦争と同じように、悪い時代に生れあわせた女として描くから、あとはあなたの演出で盛上げて頂だい。もう晚いから、眠ってね。私はこれからここにある資料を朝までかかって片っ端から読みますから。

「どんな資料だ」

——戦雲アジアの女王、川島芳子獄中記、動乱の蔭に私の半生記、と三冊ね。私の半生記の方は川島芳子の自伝みたいよ。

電話を切った後、渡紳一郎は茫然としていた。なんとということだろう。彼はもともと劇作家として世に出た男だった。演出を手がけると、場面転換などでは卓抜したアイデアを駆使するのて評判が高かった。しかし芝居は血を荒す。幕が上がるまでの異常な興奮は彼の不眠症に拍車をかけた。だから、自分で時間の配分をきちんと出来る小説の世界へ鞍替えしたのだ。演劇界と訣別するとき、彼は世間に公表しなかったが、自分自身にはっきり言いかせていた。命が惜しかったら、もう二度と芝居に手を出さな、と。

しかし推理作家に転身する前、彼は重大な失敗を犯していた。それは彼の妻を、うっかり劇作家にしまったことである。もともと子供のない夫婦で、文学少女あがりの妻であったハルは、彼と結婚する前にラジオ・ドラマなどを書始めていた。テレビ時代に入って、テレビにも書き、やがてそちらが本業になり出していたのを、紳一郎がそろそろ演劇界に嫌気がさし始めていた時期、持ちこまれた企劃に彼は妻に芝居の脚本を書かせ、彼が演出をしたのが、小野寺ハルの演劇人としての第一歩になった。以来、ハルは芝居にのめり込み、テレビよりも演劇の仕事を重視するようになってしまった。

その結果が、離婚にも繋り、今夜のこの電話にもなったのだと思うと、渡紳一郎は自分の時いた種が威勢よく成長していることの怖ろしさを感じないではいられない。

川島芳子だと、なんてこった！ 彼は腹立ちを抑えることが出来なかったが、ヴィディオが十二時すぎの数字を点滅しているのを見ると、湯を沸かし直し、パジャマに着替え、湯があまり熱くならぬうちにガスを止め、元栓を閉めて、誘眠剤を飲み下した。

川島芳子。八重垣光子。帝劇。来月。中村勘十郎。戦雲アジアの女王。獄中記。小野寺ハル。明日の朝は東竹演劇の重役たちが訪ねて来るという。渡紳一郎の頭は混乱した。その証拠に十二時半になっても誘眠剤は効いて来ない。彼はテレビのスイッチを入れた。NHKはもちろん、たいがいこの局はもう何も放送していなかった。一局だけ、くだらない昔の映画を漫然と放映していた。紳一郎は、それを眺め、努めて先刻の電話は忘れようとしたが、忘れられなかった。誘眠剤は効くどころか、頭は冴えきっていた。

「畜生！」

彼は呻いた。腹立ちまぎれに、電話をとり、ダイヤルをまわした。

——小野寺でございます。

「俺だ」

——あら。まあ寝そびれてしまったの？ ご免なさい。悪いことしてしまったわね。お薬、効かないの？ 飲み足すのだけはやめて頂だいね。

「何をしてるんだ」

——資料を読んでるのよ。面白いわ。こんなに面白い女が、どうして今までお芝居にならなかったのかしら。ワクワクするわ。でも変なのよ、私の持つて人名辞典には出ていないのよ、どうかと思うわね。女性蔑視じゃないかしら。

渡紳一郎は、別れた妻の陽気な口調に辟易して電話を切った。そして彼女が「飲み足すな」と言ったことに反発して、机の抽出しからもう一錠を取出し、まだ冷くなっていない湯で喉へ流しこみ、それから室内を歩きまわった。

災難だと思った。深夜の電話。それも別れた妻からの思いがけない頼み。昭和二十三年に漢奸として銃殺された川島芳子を主人公にするという話。舞台は当然、満蒙大陸になるだろう。渡紳一郎は、大連で生れ育ち、日本に帰って中学以降の教育を受けた。記憶にある中国は懐しいが、そこで彼がかつて見た人間関係は義理にもいいものとは言い難かった。日本人は威張りちらしていた。詰らない奴ほど中国人に対して、ひどい言動をとっていたように思う。敗戦から三十五年たっても、彼の気持の中でそうした日本人を許すことが出来ない。

新中国には行ったことがない。数々の新聞記事や書物は読んだが、国土も人口も大きすぎて到底理解できないような絶望感の方が先立ってしまう。しかし、生れた土地であるだけに、関心は持たざるを得ない。

そんな彼に、川島芳子という清朝復辟を悲願とした男装の麗人などは、過去の亡霊でしかなかった。日中戦争の裏面史としては、確かにハルなどには面白いかもしれない。しかし紳一郎は触れたくない世界だった。漢奸。銃殺。帝劇。八重垣光子。小野寺ハル。冗談じゃない、何が殺人事件だ！ 安眠妨害しやがって。